



世界へのプレゼントになろう

Be a gift to the world

# 国際ロータリー第2790地区 千葉南ロータリークラブ会報 THE ROTARY CLUB OF CHIBA SOUTH

〔創立〕1964年3月2日 〔例会日〕毎・金曜日12時30分 〔例会場〕オークラ千葉ホテル  
〔会長〕伊藤 和夫 〔幹事〕石井 慎一 〔会報委員長〕廻 辰一郎  
〔事務局〕〒260-0027 千葉市中央区新田町12-1 トーシン千葉ビル7階 (☎043-245-3204)

2015-2016年度

## 第2527回



平成28年1月22日(金) 点鐘12:30 <晴れ>

- \* ロータリーソング『手に手つないで』
- \* 四つのテスト ~言行はこれに照らしてから~
  1. 真実か どうか
  2. みんなに公平か
  3. 好意と友情を深めるか
  4. みんなのためになるか どうか

### \*\*\* お客様紹介

- 本日のゲストスピーカー  
航空振興財団羽田総合センター ヘリ・シミュレーター  
教官 鈴木 康之様
- 佐々木 武昭様(鈴木氏同行)

### \*\*\* 会長挨拶及び報告 伊藤 和夫会長

2月6日(土)と7日(日)に第2790地区の地区大会が開催されます。5日の通常例会が7日に変更となり、全員登録となっております。新しい会員の方は地区大会についてあまり知らないと思いますので、少しお話しします。

地区大会は地区の最大行事の一つであり、地区内外のロータリアン及びその家族が一堂に会します。大会決議として、RIの理事指名委員会委員の指名や代表議員の選任等の選挙、そして地区の財務報告、ガバナーエレクトの選任などが行われます。他の地区のロータリアンも大勢集まります。交流、親睦の輪を広げるチャンスでありますので、ぜひともご参加ください。

仏教の六波羅の七つの教えの中に「慈顔施(じがんせ)」という言葉があります。先週も笑顔はとても大事であるということを話しましたが、この言葉をぜひ覚えてください。

### \*\*\* 幹事報告 石井 慎一幹事

次週29日の例会は、懇親夜例会(横浜クルージング)です。

### \*\*\* RIより、会員増強記念品贈呈伝達

五十嵐 博章会員



### \*\*\* ニコニコボックス報告

#### <伊藤 和夫会長・石井 慎一幹事>

航空振興財団羽田総合センター、ヘリ・シミュレーター教官 鈴木康之様、本日はようこそおいで下さいました。卓話『30年経った日本航空機墜落事故との接点』をどうぞ宜しくお願い致します。同行者の佐々木武昭様、本日は、ようこそお越し下さいました。オークラホテルの美味しいランチと鈴木様の卓話でどうぞごゆっくりお過ごし下さい。

本日のニコニコボックス	2,000円	累計	202,000円
金の箱	500円	累計	13,610円

### \*\*\* 出席報告 (会員数53名)

出席者数33	欠席者数20	ピンター 2	修正出席率71.15%
--------	--------	--------	-------------

### 千葉市内例会変更のご案内 [メーキャップにご利用下さい。](#)

千葉RC	月	2/8・2/29	三井ガーデンホテル千葉
千葉西RC	火	2/9・2/23	センシティタワー「東天紅」
千葉幕張RC	火	2/9・2/16	アパホテル&リゾート東京ベイ
新千葉RC	水	2/10・2/24	京成ホテルミラマーレ
千葉北RC	水	2/10・2/24	ホテルポートプラザがちば
千葉中央RC	木	2/4・2/18	三井ガーデンホテル千葉
千葉港RC	木	2/18・2/25	京成ホテルミラマーレ

### 第2528回例会

#### <懇親移動例会>

日 時⇒ 平成28年1月29日(金)

場 所⇒ 横浜クルーズ船「ロイヤルウィング」

<会報当番: 廻 辰一郎会員>

## 《本日の卓話》

演題⇒『30年経った日本航空機墜落事故との接点』

卓話者⇒ 航空振興財団羽田総合センター

ヘリ・シミュレーター 教官 鈴木 康之様

昭和60年（1985年）8月12日、日本航空123便ボーイング 747SR100 型ジャンボ機（JA8119）は、羽田空港を18時00分に離陸し、大阪の伊丹空港に向かっていった。その12分後、何故か迷走をくり返し通信も途絶えて、やがてレーダーから消えた。そして、乗客乗員524名を乗せたまま行方不明となったのであった。翌朝未明になって、群馬県の上野村の山中、御巢鷹山に墜落しているのが発見された。



当時、私はまだ42歳、東京消防庁航空隊に勤務、働き盛りであった。今年8月12日がやってくると30年になる。月日の経つのは早い。私も72歳にもなってしまった。

世界中の航空会社が数多く使用している名機中の名機である、あのジャンボ機が飛行中に墜落するとは、誰も信じられなかったに違いない。その日、勤務中何事もなく定時に終えて、私は早めに自宅に戻っていた。お盆を迎え、妻と子供は田舎に帰り、私一人だった。冷蔵庫から作りおきものを取り出し、ビールを飲みながらテレビを見ていた。その時、臨時ニュースが流れた。日本航空の羽田発大阪行きジャンボ機が行方不明になったという。すぐに、航空隊の宿直者から電話があった。捜索や救助の要請があるかもしれないから、待機せよとの内容だった。一杯飲んでる場合でなくなり、私はテレビの前に釘づけになってしまった。また連絡があった。翌朝、日の出と共に飛び情報収集の一番機は、近くの待機寮にいる者が対応するので、私は通常出勤で良いとの事であった。その頃は、まだパイロットや整備士の有資格者が少なく、消防署のように24時間体制になっていなかった。何かある度に呼び出しをして対応に当たっていた。

翌日の朝早く、自衛隊機が墜落場所を発見した。大阪に向かう海上の航空路のコースから大きく外れた山の中だった。場所は、群馬県上野村、御巢鷹山の山頂付近だった。思いもよらぬ方向であったので、なかなか見つからなかった。一番機で飛んだ同僚から説明を受けた後で、私は2番機で午後1時過ぎ、東京ヘリポートを飛び立った。目的は調査飛行であった。消防庁のトップ、消防長官と秘書、それに消防総監、警防部長の4名が搭乗していた。幹部は、上空から調査をした後ヘリを降り、山を登り現場に向かうという。

現場の近くまで飛行すると、墜落場所はすぐに分かった。上空には多くのヘリが飛び交っていた。現場は、まだかすかに白煙が上がりくすぶっていた。きな臭い匂いもした。あの大きな機体はバラバラになり原形をとどめていなかった。あたりの木々はなぎ倒され、部品や衣類などが広い範囲に飛び散っている。事故のものすごさを感じとれた。その中で、左主翼の一部が残っていて日の丸とJALという文字が読みとれたのが印象的であった。

それから、指定された場所に着陸した。狭い運動場にはすでに数機のヘリが駐機していて、ギリギリのスペースしかなかった。休む所もなく、私たちはヘリの中で待つことにした。しばらくして、ざわめきが聞こえた。

「おーい、生存者が運ばれてきたぞー！」

誰かが叫んだ。報道陣がカメラをかついで、一斉にそちらの方に走って行く。ハッピーを着た消防団の一行が山を下りてきた。担架をかついだ先頭の者が、私たちの赤いヘリを目がけてやってきた。

「おー、東京消防庁の救急ヘリだ。急いで病院まで飛んで下さい。藤岡市内の総合病院です。病院とは調整が済んでいて、先方はヘリの到着を待っていますから」

団長と思われる年配の人が、私に向かって言った。運ばれてきた生存者は2名でどちらも女の子、1人は川上慶子さん（当時12歳）、もう一人は吉崎美紀子さん（当時8歳）であった。

この時、私は一瞬気になる事が頭をよぎった。航空隊に連絡して、庁本部からの出動命令を受領してからでない、自分一人の判断でやった事になる。公衆電話のありがたさを聞いてみたが、近くには無いという。車をとばして役場に行っても、数少ない電話はこの事件でパンク状態らしい。私は決めた。ここでモタモタしていたら、せっかく助かった2人の命も危ない。すぐにエンジンを始動した。その間に医師と看護婦も乗り込んだ。私は若いコーパイ（副操縦士）のM君に、無線で隊本部へ状況を説明して、了解をもらうように指示すると、操縦に専念、離陸を開始した。藤岡へと向かった。2人は無事に病院に収容できた。こうして、思いがけない救助救急活動は、あっという間に終わった。

やがて、長官以下4名が山を下りてきた。生存者女の子2名の救助活動終了の件を報告すると、よくやってくれたと労をねぎらう言葉があった。しかし、この一件はこれで幕を閉じなかったのである。帰隊してから、私は航空隊長に一部始終を説明した。だが、誰かが何故事前に連絡を取り了解を得てから実施しなかったのかと、強く責められた。今のように携帯電話もなく、近くに公衆電話もなかった。一分一秒を争っている時にどうしようもなかった。調整にとまどっている内に、もしか取り返しのつかない事態にでもなったら、私の首どころか総監の首まで飛んでしまうに違いない。私はそう主張したのだが駄目だった。無断で消防車（ヘリコプター）を出動させたのは、東京消防庁開設以来初めてであり、他の者に示しがつかないというのである。追って、何か沙汰があるという。

閃々としている間に、日々は過ぎていった。ところが、ある日、事は急展開した。群馬県知事から消防総監宛に感謝状が届いたのだ。貴庁のヘリコプター隊は、上野村消防団と連携し、迅速かつ適切な救助活動によって、生存者2名の尊い命を救出した。この事は他の規範とするものである。よってここに・・・と言った内容であった。この事で一気に霧が晴れた。私たち乗組員は、一人一人、総監からも表彰を受ける事になった。

あれから30年、今でもあの時の一場面一場面が、はっきりと頭の中に浮かんでくる。しかし、今でもよく分からない事がある。墜落現場から約300メートル下の沢に落ちて、奇跡的に助かった大人を含む4名を、自衛隊の大型ヘリで吊り上げて救出した。その中の一人、川上慶子さんが救出されたテレビの映像は、何度も放送されたから、誰でも鮮明に覚えているに違いない。あの4名は、その大型ヘリで、何故そのまま病院に直行しなかったのだろうか？ 医師と看護婦が乗っていなかったからなのか。参考になる本も読んでみたのだが、その辺のところは、ただヘリで運ばれたしか書いてなかった。

私は二番手で飛んで、思いもよらぬ救助救急に加わったわけであるが、最初に飛んだ同僚からは、あとからのこのこ行って全くとこ取りなんだからと羨ましがられた。いつか御巢鷹山に登って、慰霊塔の前で手を合わせてみたいと思っていたのだが、今のこの不自由な体ではそれも出来ないのが残念である。

